

いたかを調べ、今日の洋服と比較し、今後の衣服の参考にするため、今回は熊野速玉大社の御神服類の“薄衣”一領と“袴”一腰の地質の名称と文様・幅・重量・色相・染料について調査する。

2. 地質・文様・色相・染料の名称は文献によった。組織図は遺品を織物分解鏡で検してスケッチした。文様は写真撮影したものをスケッチした。幅は遺品の実測である。重量は遺品に最も近いと思われるものの重量をはかった。丈は遺品の各部の寸法を実測し裁ち方推定図による総用布である。色相のマンセル数値は遺品の現在の色相を画用紙上に再現し、その分光反射曲線から割り出し、三属性による色の表示方法より計算したものである。

3. 小葵の文様は鎌倉時代のものよりはるかに図案化し、色相名は文献上では一応みな同一であるのに現在のマンセル数値は三種とも非常に異なっている。薄衣の文様は非常に破損がひどく扱っているうちに粉末状と化したか、裏地の平絹は部分的破損である。遺品のうち薄衣と同時代の文綾でも破損していないものもあるので、粉末化は地質のためか染料のためか保管のためか、その原因は今後の多くの調査で明らかになると思う。この二つの遺品は後人の手が全く加えられていないのでいろいろの面からの大変貴重な資料であると思う。

B—70 室町時代の遺品、熊野速玉大社の御神服について（第1報）

星美学園短大 栗原 澄子

1. 日本の被服の歴史と生活環境を顧みながら、今日残存する遺品を調査し、当時の社会にどれだけ適応して